

麻原は「アピラケツノミコト」を命じらる啓示を受け、以来、オウムの拡大に全力を傾注してきまされた。そして一九八八年秋、その思いは目に見えらる形となつて現れつつありまされた。日本に五本支部のほかに、ニューヨークにも一支部を既に設置。同年八月には、富士山を真近に臨む絶好の地に、富士山総本部道場を建立。信徒教も出家信徒が約一五〇人、在家信徒が約三〇〇〇人に達しまされた。当時、麻原は述懐して「このわすか三年間のうちに、シンウア神のご意思がオウムを全国規模の——いや全国規模どころか、二エーヨークに支部を有し、今年中にもまだいくつかの海外支部にまで、予定の世界規模とも言えらる宗教団体に発展させてくたさつた」と。

*3
そのよう「同年一〇月二八日、麻原は出家者に対して説法をしまされた。

わたしは今から三年前に、これは「トワイライトゾーン」を使つて、わたしはアピラケツノミコトである、今して先の軍勢を率いて救済するんだと、ケウという比喻を使つてゐる。

当初、初めは、わたしはね、凡夫を救済するのがわたしの役割だらうと考えていた。しかし、近ごろわたしは心は少しずつ4変わつてきてゐる。どのように変わつてきたかという、ひまよつとしたり、動物化した、あるいは餓鬼化した、あるいは地獄化した。この人間社会というものの救済は不可能なかもいれ種、つまり、今の人間よりも霊性のすつと高い種、これを残すことがわたしの役割なのかもしれない。これはまだ「漢」としたものである。はつきりしたものではない。だから、すれらかもいれない。

来年のオウムの動きは、目ざましいものがあるだらう。そして激しいものがあるだらう。(富士山総本部道場)

ここで、今の人間よりも霊性の高い種、これを残すとは、オウムの信徒のみを残し、それ以外の人類を殺害することを意味します。その目的で麻原は、一九九〇年に猛毒のボツリヌス・トキシンを

- *1 シンウア神とは、オウムの主宰神であり、宇宙の破壊と司る神、麻原のグル(霊的指導者)もあつた。
- *2 日威の目、麻原彰晃著、オウム出版
- *3 出家者向けの説法は多くは、出家者以外の者が接するのを禁じられていた。
- *4 凡夫とは、仏法に帰依してない人、オウム下は「非信徒の意味」。
- *5 教団発行の「導師フアイナルスピーチ」五・説法集上
- *6 シンマンバウには、許された聖者としての地位が、アピラケツノミコトとして地上にシンマンバウと実現する人、信むことが許されらる者と排除するといふ考えがもたらされた。

を世界中に散布するものと企圖しました。ウアジラヤーナの救済へと踏み出す麻原の意思を示すと考えていいでしょう。

麻原がこの救済について、71年頃のオウム運動さりと差し迫った時期を掲げて示唆した例は、それ以前の説法には見当たりません。ですから麻原のこの変化について、検討したく思われます。

麻原は「アピラケツノミコト」を命じる啓示を受けたものの、その時点においても、その後の時点においても、率いるべき老の軍勢は存在しません。またその啓示は、麻原がその実現に向かうにあたっては、あまりにも漠然とし過ぎていました。つまり、老の

軍勢を率いて戦うまでのプロセスに因する情報がまったくとく欠落していったのです。たゞえは、合法的に政権を握った上で戦争を起すのか、あるいは超法規的な手段に訴えるのか……

これでは動こうにも動けません。シヤンバラ建国の意志が刻印された麻原の脳細胞が、その実現も身体にくら指令しても、今の均衡が破れたのは、シヤンバラ建国のプロセスを示す「情報」が麻原にもたらされたからかも知れません。

「ヨハネの黙示録」の封印を解いてしまえばいい……麻原は一九八八年秋、シウア神から示唆を受けたといえます。そして側近の出家者と共に、ヨハネの黙示録の解説作業に取りかかりました。その作業の様子が、「滅亡の日」に描写されています。

「この水紙の後の方は、もつと興味深いことば書いてあるよ。勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持つ続ける者には、諸国民を支配する権威と授けらる。彼は鉄のつえをもつて、土の器を砕くように、彼らと治めるであらう。」

「この言葉だ。オウムのこれからの動きへの示唆ではないか？ シツシヤは全員タントラ・ウアジラヤーナの修行者」

オウムはウアジラヤーナの救済によつて、世界を統治する……そのように、麻原は「ヨハネの黙示録」を解釈したのである。彼は鉄のつえとも、麻原が武器をも砕くように、彼らと治めるのであらう」という記述は、麻原が武器をも砕くように、諸国民を支配することを示す。

ヨハネの黙示録とこのように解釈して、結果、麻原にはシヤンバラ建国のつまりウアジラヤーナの救済への道筋が見えてきた。下の虚空への中、71年頃の滅亡の日と本書を合わせて読むと、よつて、ヨハネに「黙示録」を書かせた神の大きな救済計画が浮

かび上がって、よつと述べています。

「ヨハネの黙示録」のこのように解釈して、結果、麻原にはシヤンバラ建国のつまりウアジラヤーナの救済への道筋が見えてきた。下の虚空への中、71年頃の滅亡の日と本書を合わせて読むと、よつて、ヨハネに「黙示録」を書かせた神の大きな救済計画が浮

かび上がって、よつと述べています。

「ヨハネの黙示録」のこのように解釈して、結果、麻原にはシヤンバラ建国のつまりウアジラヤーナの救済への道筋が見えてきた。下の虚空への中、71年頃の滅亡の日と本書を合わせて読むと、よつて、ヨハネに「黙示録」を書かせた神の大きな救済計画が浮

麻原は、仏教のウアジラヤーナの教えに独自の解釈を加え、ウアジラヤーナの救済を説きました。カギエ派は、そのウアジラヤーナの系統を以てす。麻原はカギエ派の修行者列伝を「一は引用し、ウアジラヤーナの教えを説いていきました。その宗派の総帥を招いたこと、この麻原がウアジラヤーナを強く志向していったこと、このことがえまます。

その頃、麻原は信徒に対し、ウアジラヤーナの教えを頻繁に説くようになり、当時説かれたのは、信徒を解脱・悟りに導くための教えでした。後のウアジラヤーナの救済の説法の基礎となる教えでした。（もろろんカギエ派の教えは、麻原が信徒を違法行為に導くために説いたウアジラヤーナの救済の教えとは異なります。）

また麻原は私に対し、何らかの誘いかけをしたことがあり、同年九月五日に東京大学で開催された説法会でのことでした。

「一緒にやりましょう」といって、説法を終えた麻原は私に歩み寄り、唐突に話しかけました。そのとき私は、麻原の強いエネルギーに包まれ、全身がしびれたようになります。そして、答えるのが精一杯でした。たゞ同時に、何と一緒にやるのか、導師は私に何を求めてくれるのだろうか、との問いも心に浮かびました。

その前日私は、麻原の側近中の側近といえる大塚から電話連絡を受け、その前日、東大での導師の説法会に出席するようになり、その大塚は、麻原から指示され、限り私に連絡をとりなさい、とす。

麻原がそのように中間をかけたのは、その背後には、強い思念が存在したからでしょう。そのうすすす、ウアジラヤーナの救済を内に秘めていたことが思えません。

さらに、教団が初めて違法行為に手を染めるに至る出来事が起き、その際、麻原が「これはウアジラヤーナに入れたい」というウア神話の示唆を「と語るのを、側近の出家者が聞いています。同年九月二七日富士山総本部道場において、修行中だった在家信徒の真島照之氏の死亡事故がありました。麻原は、この事故が宗

＊1 麻原は「アビラケツノミコト」の終末を受け、神々に相談したという。
「理想国を造るため、戦を用いてよいのか」と（前出のトワイライトゾーン）。
仏教と信奉していた麻原は、その不殺生戒とアビラケツノミコトの使命の両方を盾と解決する必要があるため、その解決と、麻原は仏教のウアジラヤーナの教えを見出した。ウアジラヤーナには、救済すべき人々を呪殺し、仏国土に導くという遠慮があるから、また遠慮では、その殺生について、慈悲心に基づく衆生の救済として正當化して、その行為を違法行為も許されることを考えるようにした。ウアジラヤーナの考えに基づき、ウアジラヤーナの救済を説き、これを実行した。

＊2 第三章第二節「頁参照」

＊3 第三章第一節「参照」

＊4 日記に「アウムとは何だ、たのしみ」 早川紀代秀・川村邦彦著「ボッパラ社

教法人格取得の妨げにあらざることと恐れ、真鳥氏の遺体をドラム缶の中へ焼き、遺骨を道場付近の湖に遺棄したのです。

麻原は真鳥氏の事故について、救済活動と遅らせないためには、違法な手段によって対処するしかないと考えたのでしよう。ウア

ジラヤリナ的”の思考様式に基づいて、そしてそれを契機として、麻原はウアジラヤリナの救済を開始する決意を固めた可能性があり

ます。ウアジラヤリナに入れこいウアジラヤリナの咳払い”と、ウアの後も、このように教団の拡大に支障を生じる状況になると、

麻原はウアジラヤリナの救済に向けた行動を先鋭化していきました。たに、麻原を動かした本質は、その状況”そのものではないは

ずです。その”状況”が、麻原の行動の目的——つまり、地球上にオウムの国家を建設すること、あるいは人類をホアすること——に

比してあまりに矮小であり、この目的と釣り合っていないからです。本質は、アピラケツノミコトを命じる啓示の際に生じた意志です。本

々の”状況”は、その意志を刺激したに過ぎないでしよう。

以上のよう一九八八年の秋頃には、麻原の内面において、ウアジラヤリナの救済の野望は押さえ難いものになっていったようです。

そして、この救済へ向かう意思を示した説法の約三週間後、麻原は側近の大師に対し、後のオウムの動きに関して指示しました。その大師が作成したメモを次に示します*2。

六十二年十一月五日は黙示録の予言を麻原が七つの予言の後に世界戦争。二〇〇〇年まであと一二年しかない。滅亡の日を出版しらる。

一五日、オウムの方向性……旧約聖書によるとオウムの時間はあると七年、石油の下落、マルマゲドン、ソ、米、日、世界大戦

デザイン編集がプロパガンダマシンに完璧になりきること（人材と経済力のためでもある）

一、新信徒の獲得、二、人材ハンター（ブレインハンター）（信徒の中から選ぶ）、三、大学理教化学の人材をぬきこむ

四、ドクター（医者）を集める、五、美人を集める（看板）

六、経済的センスを持つている人間（プロパガンダ広報）七、法律専門家、八、大師（一人で二、三億）が五〇〇〇人、九、

建築班一〇〇〇人、一〇、七年後大師だけの一四五〇〇億

「大学理教化学の人材をぬきこむ」との指示からは明らか、麻原が理系の人材の獲得を重視していたことがうかがえます。それは

科学技術を用いた大量殺人である。ウアジラヤリナの救済”を意図して、たからでしよう。それ以外の解釈はできません。（なお、このメモからは、ウアジラヤリナの”結果、麻原がかかり指

示を出すに至ったことがうかがえます）

*1 教団が遺体と処理したほうが、真鳥氏の転生がよくなることを考えました。
*2 この指示の内容は、一般信徒には明らかにはされていなかった。

かくして、オウムは動き出し、麻原は在家信徒に對して、現代人は悪業をなしてゐるために来世は三悪趣に転生する。世に核戦争が起るといふこと以前にも増して人類の危機を訴え、未だに、オウムとして、その救済のためとして、信徒に布教活動をさせた。また出家の必要性を訴え、多くの在家信徒を出家させた。り、す。

オウムの信徒制度では、在家信徒のほかには出家信徒が定められていた。オウムの出家とは、世俗的の関係を一切絶ち、麻原に全生涯を捧げ、すべての魂の救済と自己の解脱に専念することとした。この救済とは、今の対象について、まず三悪趣への転生を防ぎ、最終的には解脱させることとした。最終的な救済は、今生の一生のうちに到底達成不可能なので、麻原と共に転生を繰り返して、何万回か以上以上の生をかけたの達成を目指すべきものとした。出家者は一般社会から離れ、教団施設内で共同生活をする。ことに、り、解脱するまでは、家族や知人に会うことも、連絡することも禁止された。家族と同じ墓に葬られることもありません。死後のことは、麻原・教団にすべてを委ねることになった。出家時に一円も残さず、教団に布施します。出家後は、毎月一五〇〇円の「業財」が支給されますが、これは最低限の生活必需品の購入のため、使う程度で、ほとんどの額を教団に再び布施することになります。私物として所有できるものも、許可されたもののみです。普通、それは衣装ケース（大きさは約20×35×60cm）二箱分の、麻原の著書、筆記具・説法テープを聞くためのヘッドホンステレオ・衣類でした。飲食できるものも給与されるので、オウム食のみにあり、通常、教団外で活動するとき以外は一食は禁止された。オウム食は、夏、冬、春、秋、それぞれ、私が出家した直後のものは一日一食で、飯と、人より一杯・根菜水煮とんぶり一杯（各自が塩下味付け）・納豆一杯、パッパのり半枚・ひたひた大さじ一杯・豆乳お玉二杯でした。

書籍・新聞・テレビ・ラジオなどの教団外の情報に接することも、奉仕行で必要な場合以外は一切禁止された。これらの戒めは、三悪趣に転生する原因になり、また解脱の妨げになる煩悩を消滅するためのものでした。つまり出家レベルに達した家族に對する愛情さえも煩悩とされた。滅尽すべき対象に達した。す。

オウム出家者は、睡眠や食事などの時間を除き、奉仕行と修行に、

- *1 転生を良くするために、遺体は教団内で荼毘に付し、遺骨は教団内に納骨された。
- *2 業財とは、これを布施した在家信徒の業（カルマ）に込められて、この意味、業財を使うと今のカルマが自身に移るとされた。出家者は使うのをなるべく控えた。一九九三年一月からは、教団から課された修行プログラムを進むに依り、七〇〇〇円から一五〇〇〇円、範囲で支給されるようになった。
- *3 教団は各出家者に對し、ワークと呼ばれる奉仕行を課した。その目的はすべての魂の救済とされた。ワークは、本支部の運営・書籍の出版（編集から印刷・製本まで）・教団施設の建設など、教団の活動のほとんどを領受した。

勤むことになりす。休日も自由な時間もありません。また私の出家直後の頃は睡眠時間も修行スリッジに定めておりました。スリッジが高くおりに従い睡眠時間は五時間の三時間に減少しました。そしてそれが守れなかった場合、食事を一回抜くという罰則も定められておりました。私が所属した部署では私の出家直後の頃は集団行動をしており睡眠時間は四時間と決まっていた。また一日一食を徹底するおりに午前八時に集団で食事し、午後以外の時間には食事はできませんでした。

入信時、私は出家をまったく考えていませんでした。長男という立場上、親の老後を見たいと思っていたからです。また、私に出家するに家庭が崩壊しかねないとも思っていたからです。その後も入信前に読んだ麻原の著書による、在家でも解脱可能だった。そのような無理をしてまで出家する必要を感じませんでした。加えて教団も、出家を制限していたのです。事実、一九八八年一〇月の私について、就職の内定を喜び、安心している様子だったので母は法廷証言していただきます。今の時点で私は出家の意思は皆無でした。

ところが、私は出家することにになりました。私の入信後、麻原が教団の拡大のために、出家者の増員を図られたのです。私の入信前の一年半の間に約六〇人が出家したのに対して、入信後の一年間には約二〇〇人が出家しました。

特に、麻原の命を受けて教団が人材の獲得に乗り出した。一九八八年一〇月後半以降は、各本支部において出家勧誘の嵐が吹き荒れました。その結果、年度末までの翌年の三月末までに、約一〇〇人の在家信徒が出家しました。

この状況について、理解に苦しまれる方もいらっしゃいます。麻原が教団の意思に途端、信徒は、これも簡単に、前述のような非人間的なこともいえる出家をしたのかと。オウムに關する論評を読むと、この問題の扱いは、一方に著者の戸惑いを感じます。

ここで私は、これも簡単に述べましたが、この言ひ方には、語弊があるかもしれせん。信徒が出家に向かっただけには、桐原の背景が存したからです。

麻原が信徒に対して訴えたようにオウムにおいては、現代人の日常的な行為は、悪業に含められ、一一般社会は悪業とみなす行為を促し、私たちが三悪趣に転生させることで警戒させ

*1 入信後の後、長時間睡眠は強く勧められたが、睡眠不足のため事故が多発した。
*2 当時教団は、必要とする在家信徒に対しては出家の勧誘としたが、出家を許す条件として二〇〇万円以上の布施と課すこと、出家に高いハードルを設けていた。
*3 第二章第二節六十八頁参照。
*4 社会心理学的研究によること、西田公昭「一九九五年、ビリーフの形成と変化の機制」について、研究(4) 社会心理学研究 第一一巻第一号 (一八一-二九)

ていよいよこの教義が受容されると、信徒は一般社会での生活において、葛藤にさいなまれることになり、悪業を積むのを回避するために、周囲の非信徒の人たちと協調し、状況が生じてくるから、たとえは信徒は、友人から「何かうまいものでも食べに行こう」と誘われると、対応に苦慮せざるを得ません。グルメは、餓鬼に転生する原因になります。

そして信徒において、このように教義によって行動にブレキのかわる状況が生活のあらゆる場面に及ぶようになる。入信前に培われた一般社会との絆は失われます。

また宗教的経験が起る状態では、世俗的なことに對する関心が薄れるという報告があります。この要因によっても、宗教的経験をしていた信徒は、日常生活からの離脱が促進されたのではありません。

私の場合も、一般社会に関する緊迫した話を教団で聞いているうちに、今の話のとおりの宗教的経験が身の上で現れました。たゞえは私の公判で、友人が次の証言をしました。一九八八年の晩秋の初冬に私が話した内容です。

街中を歩くとヴァイブレーションを感じ、電車内のいかにわがわがしい広告を見ると頭が痛くなる。繁華街の近くにいると体調がおかしくなるという話がありました。

当時私は、会話をするなとして非信徒の方と接したり、街中を歩いたりすると、カルマ(悪業)が自身に移っていくのを感じました。これは、気体のようなものが振動(ヴァイブレーション)を伴いながら身体に入っていくような感覚でした。また同時に、表現し難い不快な感覚も誘起されました。まるで、自身の生命活動を維持している源が、蝕まれるような。そして、この感覚の後に私は、自分が「オン—カンガルー」のような頭部で、鼻の先に目がある—などを見ました。

このヴァイジョンは、カルマが移り、自身が三悪趣に転生する状態になったことを示すこととされてきました。(下すから私はこの経験によつて、人々が三悪趣に転生することを実感してました)さらに、今の感覚(エネルギー交換)の後に私は、心身の状態も悪化しました。エネルギーの通る管が詰まり、身体に異和感を覚えたので

*1 Raymond Prince and Charles Savage, 1966, *Mystical States and the Concept of Regression. Psychedelic Review*, 8.
*2 エネルギー交換(第二章第二節三四頁参照)は、信徒と麻原の間にだけなく、非信徒と信徒の間でも起るものとされた。一般にエネルギー交換は、修行ステーションに差がある両者の間で起るものとされた。また、物にもその所有者のカルマが込められて、いるとされ、融れると今のカルマが自身に移るとされた。
*3 序章三頁参照。
*4 第二章第二節一頁参照。

す。あたかもカルマが管を詰まらせたりせたりのように。同時に私は、工
ネルギーの流れが阻害されてそれが身体に充滿しなくなり、消沈し
た精神状態になりました。

この理由で私は、麻原がエネルギーを込めた石を握りながら、力
ルマを浄化する修行をせざるを得ませんでした。自身に三恵趣に転
生するのを防ぐために、そして心身の不調から脱するたためです。

また私は、広告を始めとして情報によつては、接するたためです。
心身の変調が起きたのです。一般社会の情報は煩悩を増大させて
人々を三恵趣に転生させるという教への影響です。

今の一方で、私は修行をして、いかにいかに下も、麻原の心地よい工
ネルギーに頭頂から注がれて心が澄みわたたり、自身のカルマが浄化
されるのを感ずることにありました。このように状態は、奉仕行に
よつてもたらされました。

これが當時の日常でしたから私は、一般社会の影響によつて人々
がカルマを増大して三恵趣に転生するのに対して、麻原だけが人々
のカルマを浄化できるところを、肌で感じていました。そのために私にと
つては、麻原の説くことが、一般社会で通用して、いかに価値観

り、思考・行動様式、三恵趣に至るものとしての映るべく、
意味を失いました。その結果、意味を見出せるものは、解脱・悟

エネルギーの状態は、信徒の精神状態に直接影響した。つまり信徒は、エネルギ
ーが身体内を上昇し、身体に充滿して、いかにいかに（感覚がある）とき、気分が高揚した
逆は、エネルギーが下降したり、管が詰まると、その流れが阻害された。したがって信徒は、精神
状態を安定させるために、修行によつてエネルギーの状態を適切に維持する必要がある
にあり、このように信徒にとつて、精神の不安定が麻原へのエネルギーによる力
ルマの浄化によるものでもたらされ、精神の不安定が一般社会のコンテクストにお
いてもたらされた。後者の精神的不安定は本文で述べたように、意思の因縁なく
反射的に誘発された。条件付けに起因すると思われ、このように状態は、
信徒において、麻原に対する帰依や教団への従属が強まり、一般社会からの離脱
を促進される背景として存在した。

第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われ、
信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事と、教義の文脈で意味付け、た、たえは
前述（序章三頁）のよう、暗示と条件付けによる出来事と、自身に過去
の転生と条件付けによる出来事と、自身に過去

第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われ、
信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事と、教義の文脈で意味付け、た、たえは
前述（序章三頁）のよう、暗示と条件付けによる出来事と、自身に過去
の転生と条件付けによる出来事と、自身に過去

第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われ、
信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事と、教義の文脈で意味付け、た、たえは
前述（序章三頁）のよう、暗示と条件付けによる出来事と、自身に過去
の転生と条件付けによる出来事と、自身に過去

第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われ、
信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事と、教義の文脈で意味付け、た、たえは
前述（序章三頁）のよう、暗示と条件付けによる出来事と、自身に過去
の転生と条件付けによる出来事と、自身に過去

第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われ、
信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事と、教義の文脈で意味付け、た、たえは
前述（序章三頁）のよう、暗示と条件付けによる出来事と、自身に過去
の転生と条件付けによる出来事と、自身に過去

第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われ、
信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事と、教義の文脈で意味付け、た、たえは
前述（序章三頁）のよう、暗示と条件付けによる出来事と、自身に過去
の転生と条件付けによる出来事と、自身に過去

りを目指すことのみになつたのです。
起す教義を現実として感ずるようになり、日常生活との間に摩擦を
さました。この状況について、検察官の「広瀬から出家の原因、理
由を聞いた」といふのが、この確認に付して、私の指導教授は「結
局、神秘体験だと言つていい」と法廷証言してあります。
また私は出家することになり、三恵趣に転生する可能性の高い親を
救うことになり、さされていたからで、出家にあたり一番の障害は親
の功德にさるさされていたからで、出家にあたり一番の障害は親
子の情だつたので、それを除くために、オウムではそのように説か
れていたのです。家族ごと周囲の人たうが三恵趣に転生することとを
信じて心から案じていたので、この教えは効果てきめんでした。
こうして、教団が出家を訴えるようになり、私は出家願望を抱
くようになりました。世紀末の人類の破滅というタイム・リミット
をにらみながら、家族の説得に必要期間や就職が決まっていた事
情なども考慮して、二、三年後の出家にさると思つていました。

しかし教団は、私のそれまで積み上げてきたものがまったく通用
の講師などをすると先生と呼ばれ、教団では、高校を卒業
して間もない年下の大師に頭で使われる場面もありました。学歴の
価値は認められ、修行を進め、蓮華座がまじり、身
体が固く、修行は必須の蓮華座がまじり、身
た、その解決の見通しも立たない状況でした。組めなかつたのです。
このように私にとつて、出家は極めて険しい道でした。それにも
かかわらず私の心が出家に向かつたのは、オウムの宗教的世界観が
現実として感ずられたからに他なりません。輪廻の原理やカルマの
法則は、これに従わなくてはなりません。物理法則にたつたのです。
すると必然的に、三恵趣への転生に結びつく一般社会を避け、解脱
悟りに誘われる出家を志向することになります。

そのよう、一九八八年の年末、私は麻原から呼び出されました。
麻原は「救済が間に合わない、もう自分の都合を言つていふ場合で
は、い」と出家を強く迫ります。私は麻原に従い、大
学院修了後に出家する約束をしました。それから、翌年三月三十一日に
出家しました。

＊1 出家を考えた契機は突然、頭の中で何かはたつたような感覚が、へ出家し

＊2 出家を考えた契機は突然、頭の中で何かはたつたような感覚が、へ出家し
よう、という考えが浮かんだことだ。私はその意思と直ぐに、近くにはいた紅
家信徒に伝えた。大学での奉仕行を終え、帰宅のためにキヤンパスを歩いている
ときだ。私は信徒時、このよう、一種の悟りの着想を経験することば
あった。

＊3 当時の出家者は、オウムでは学歴は関係ないと言つていた。ただ、一九九四
年にさると、高学歴の者が多い修行スチージと見え、傾向が現れた。